に紺の袴を召され、こぶし栗毛の馬に打ち乗り、御供三十余人召し連れ、その夜の内に湊をさして急ぎける。

十二月二十八日明方に湊永覚町に着き給う。心静かに通らるる。時刻能しと件の伏せ勢四方より一度に、ぱっと掛け出、余すまじというままに、おっと構えて討たんとす。五郎きっと見て、こは何者なればいかなる子細ぞ、語れ語れ、と呼ばわるる程こそあれ、辺に近づく奴原を五、六人掻摑んで弓手、妻手へ投げ捨て残る奴原四方へぱっと追い散らし、辺を白眼んで控えたり。

小和田これを見て南無三宝仕損じたり、と鉄砲数多打ち放す。五郎殿は鎧物の具は着ざり、素肌なる身に何かはもってたまるべき、真ただ中を打ち落され、朝の露と消え給うは無残なりける次第なり。

そのほか御供の人々も心は猛く思えども主を打たれ気を失い、今を限りに切ってかかる。されども敵は大勢、飛道具を打ち放され何かはもってたまるべき、三十余人一つ枕に伏せ、朱になってぞ死にたりける。

五郎殿、最期のほど無念類はなかりけり。

甲斐守、押切城給う事、附、五郎が霊魂の事

小和田甲斐守は、五郎殿を心の儘に打ち奉り急ぎ御前に罷り出、五郎殿と追罰の趣、高名顔にて申し上げる。

助殿聞こし召し、喜悦の眉を開き、神妙の働きこの度の忠功に、則ち押切の城代仕れ、と仰せ下されける。小和田ありがたく御前を罷り立ち押切へぞ帰りける。安藤兵部正は岡本を支配致すべしと御盃を給わりける。かくて小和田城へ帰り月日を送り、奢り日々に重なりて、ある時、船三十艘用意させ、子息喜四郎を始めとして家中の男女、船遊山に潟へ出、猟師を集め魚を採らせ、種々に慰み、さんざめして遊びける。

日も西山に傾きし頃、男鹿寒風山より車輪の如くなる光り物、申の方へ飛び行くと見えければ、悪風しきりにして黒雲一群、船の上に五丈ばかり舞い下り船を渚に寄せんとすれども、一向動かさず、よりより稲妻閃いて船の辺りを飛び廻る、女・童は気を失い、大方潟へ揺り落され死する者こそ多かりける。小和田親子が乗りたる船、ようよう岸へぞ漕ぎ寄せける時に、雲の中より声上げて、恩はあだしたり、無念なり、重ねて摑みくれん、とて言う声ばかりは、有明の月白々と出にける。小和田は夢の覚めたる心地、大汗かいて起き上がり、ため息ついていたりけり。誠に甲斐無き